

## 第二コリント書10-13章におけるパウロの論敵

山田 耕太

### 1. 始めに

第二コリント書におけるパウロの論敵が一体誰であり、パウロは誰から批判を受けて、それに対して自分の立場を弁明しているのか、という問題は、19世紀のF.C.Baur<sup>(1)</sup>が問題を提起して以来、新約聖書において原始キリスト教史を解明する上で重要な問題であると認識されてきている。しかし、問題は未だに解決されておらず、意見の一致を見ていない。本稿では、既にさまざまな議論がなされてきた、この古くて新しい問題に対して、修辞学的批評の立場から新たな視点を提供して、今までの議論とは違った角度から改めて議論し、論敵の全体像を再構成することを目的とする。

本稿では、第一コリント書と第二コリント書のパウロの論敵は同一である、というF.C.Baurの見解とは異なって<sup>(2)</sup>、両書のパウロの論敵の問題は密接に関わるのであるが、別の問題である、という今日ではほぼ共通した見解から、第二コリント書におけるパウロの論敵の問題を取り扱う。また、今日では多数意見となっている、第二コリント書1-9章と10-13章は別の手紙である、という立場から<sup>(3)</sup>、問題を10-13章に限定して論じることとする<sup>(4)</sup>。すなわち、第二コリント書1-9章におけるパウロの論敵の問題と第二コリント書10-13章におけるパウロの論敵の問題は、さらに密接に関連するのではあるが、10-13章における問題は、コリントへの侵入者(Ⅱコリント11:4)によって引き起こされたのであり、1-9章で問題を引き起こした「不正を行なった者」(Ⅱコリント7:12)とパウロから批判されたコリント人とは別人である、という立場から論じることになる<sup>(5)</sup>。

第二コリント書10-13章は、他の書簡に比べて、パウロの論敵の姿が明確に描かれている箇所ではあるが、本稿では今までの議論のように論敵の像の一部分を強調して論じるのではなく、書簡理論的視点と修辞学的視点によって全体の構造を分析した結果に基づき<sup>(6)</sup>、論敵の全体像をバランスよく明確に描き出すことを以下で試みてみたい。その前に、従来どのような議論が重ねられてきたのかを瞥見してみることにする。

## 2. 研究史的回顧

第二コリント書10-13章におけるパウロの論敵について、今までなされてきた議論は、以下のように大別される。すなわち、ユダヤ主義者、グノーシス主義者、ヘレニズムの「神の人」(θεῖοι ἄνθρωποι)、エルサレムから派遣された霊能者、高慢な者、という五つの類型に分かれる<sup>(7)</sup>。

### (1) ユダヤ主義者<sup>(8)</sup>

F.C.Baurは、パウロの論敵の問題が原始キリスト教史を解明する鍵であることを最初に指摘し、後の新約聖書学に大きな影響力を与えた人物であるが、既に19世紀前半にパウロの論敵がユダヤ主義者であることを指摘した。Baurの再構成した初期キリスト教史は、正(ペトロ主義)・反(パウロ主義)・合(初期カトリシズム)というヘーゲル哲学の概念に影響を受けていたが、ヘーゲル哲学の概念を払拭した上でも、今日でも第二コリント書10-13章におけるパウロの論敵がユダヤ主義者である、という見解がかなり支配的である。その立場は、Baurの釈義を主要な点で継承している英国を代表する新約学者であるC.K.Barrett<sup>(9)</sup>によって代表され、また死海文書との関連を示唆するJ.Gunther<sup>(10)</sup>、さらにはBaurの視点を現代化して原始キリスト教史を再構成しようとするG.Lüdemann<sup>(11)</sup>によっても表明されている。

この解釈では、まず第一に、パウロの論敵が「ヘブライ人、イスラエル人、アブラハムの子孫」(11:22)であることを誇り、「義に仕える人」(11:15、「義」は「律法」と深い関連がある)と自認していることを強調する。

第二に、「異なる福音」(11:4)は、ガラテヤ書の「異なる福音」(ガラテヤ1:6)と同じ言葉であり、ガラテヤでパウロが直面したユダヤ主義者と彼らとの類似性を示唆する。

第三に、とりわけBarrettによれば、「大使徒」(11:5、12:11)は「偽使徒」(11:13)とは異なり、ガラテヤ書の「重だった人々」(ガラテヤ2:2、6)や「柱と目されている人々」(ガラテヤ2:9)と類似の表現であり、エルサレム教会の指導者層を指す。また、「偽使徒たち」とは、エルサレム教会から派遣されたユダヤ主義者のことである。さらに、「神の測りによって割り当てられた基準」(10:13)とは、使徒会議でペトロとパウロが、それぞれユダヤ人宣教と異邦人宣教に分けた領域を意味し、「限度を越えて誇る」(10:13、15)とは、ユダヤ主義者がパウロの宣教領域に侵入し、彼らがまるで自分達の宣教成果で

あるかのように誇ることを意味する、と理解する。

## (2) グノーシス主義者<sup>(12)</sup>

この立場は、第一コリント書の論敵と第二コリント書の論敵の連続性を主張する人々にしばしば見られるが、今世紀初頭では、宗教史学派とその影響下にあるW.Bousett<sup>(13)</sup>、W.Lütgert<sup>(14)</sup>、A.Schlatter<sup>(15)</sup>、R.Reizenstein<sup>(16)</sup>らによって代表されてきた。戦後は彼らの影響を受け、今世紀の新約学を最も刻印づけたドイツの新約学者であるR.Bultmann<sup>(17)</sup>にも見られ、現在ではブルトマン学派のW.Schmithals<sup>(18)</sup>によって代表される。

この解釈では、第一に、パウロの論敵が「ヘブライ人、イスラエル人、アブラハムの子孫」(11:22)であることよりも、彼らがコリントの共同体の外から「やって来ている人」(11:4)であり、「異なる霊」(11:4)を伝えたことを強調する。

第二に、彼らがユダヤ主義者のような律法主義者ではなく、霊的熱狂主義者であり、霊を所有している霊能者であること(10:2)を強調する。すなわち、パウロの唱える律法からの自由を曲解して、放縦にまで陥った初期のグノーシス主義者である、と理解する。

## (3) ヘレニズムの「神の人」<sup>(19)</sup>

この立場は、最初の二つの相対立する解釈の間に位置づけられるが、ブルトマン学派のD.Georgi<sup>(20)</sup>と、テュービンゲン大学のG.Friedrich<sup>(21)</sup>によって表明され、とりわけ前者によって代表される。

この解釈では、第一に、パウロの論敵の役割が、「キリストに仕える人」(11:23)、「使徒」(11:5、12:11)、「働き人」(11:13)であることを指摘する。すなわち、彼らが宣教者であることを主張していたことを強調する。

第二に、彼らは「ヘブライ人、イスラエル人、アブラハムの子孫」(11:22)であると自認していたことを指摘する。

第三に、霊的な力を持っていることを主張することから(10:2、11:6、12:1-4、12)、彼らが霊能者であることを認めるが、Georgiによれば、彼らはヘレニズム・ユダヤ教に背景がある「神の人」に帰され、Friedrichによれば、ヘレニストのステファノー派(使徒6-7章)に帰される。

#### (4) エルサレムから派遣された霊能者<sup>(22)</sup>

これは基本的には第一の立場の変形であるが、さらに第二の立場よりも第三の立場に近づいている。この立場は、ブルトマン学派のE. Käsemann<sup>(23)</sup>によって代表される。

この解釈では、第一に、パウロの論敵が「キリストに仕える人」(11:23)、「働き人」(11:13)であることを指摘するが、彼らが「悪い働き人」「サタンに仕える人」「偽使徒」とであるとパウロに批判されていたことを指摘する。

第二に、彼らが「やって来ている人」(11:4)、すなわち侵入者であることを強調し、コリント人がそれに耐えていることを指摘する。

第三に、彼らが律法主義者ではなく、グノーシス主義者でもなく、霊的能力を持って「他のイエス」(11:4)を伝えた霊能者であることを強調する。

第四に、Baurと同様に、「大使徒」(11:5、12:11)と「偽使徒」(11:13)を別人であるとし、「大使徒」はエルサレム教会の指導層を指し、「偽使徒」はそこから派遣された霊能者である、と結論する。

#### (5) 高慢な人<sup>(24)</sup>

この立場は、G. Theissenの社会学や社会史の方法論を取り入れたコリントの共同体の分析や、そこから発展した原始キリスト教史を受け入れた上で、社会史ばかりでなく古典学の視点でも新約聖書を分析したオーストラリアの古典学者E. A. Judgeの立場を併せ用い、その弟子であるM. P. Marshall<sup>(25)</sup>によって表明されている。

この解釈では、第一に、コリントの共同体とパウロは友好的な関係にあったが、パウロが自給自足の宣教活動をして、コリントの裕福な社会層であった人々から、パウロを支援するための献金の申し出をパウロが拒否したことから、パウロとコリントの共同体が敵対的な関係になっていったことを社会学的な視点をを用い、またギリシア・ローマの古典からの並行箇所を用いて解明する。

第二に、コリントの共同体におけるパウロの論敵の特徴として「高慢な人」(Ⅰコリント4:6、18、19、5:2、8:1、13:4。Ⅱコリント10:5、11:7、参照)であることに注目し、それが「自分自身を推薦する」こと(3:1、4:2、5:12、6:4、10:12、18、12:11、参照)とほぼ同義であり、また他にも「高慢な人」と関連する用語を指摘する。

第三に、「高慢な人」という特徴は同じであるが、第二コリント書のパウロの論敵は侵入者であり(11:4)、コリントの共同体に属する第一コリント書のパウロの論敵と異なることを指摘する。

### 3. 方法論的吟味

第二コリント書におけるパウロの論敵に関する最近の研究書で、J.L.Sumneyは方法論を吟味した先行的研究<sup>(26)</sup>と比較して、徹底した方法論的考察を行なって、過去の研究に対して批判的な吟味を加えている。

第一に、パウロの論敵を歴史的に再構成する際に、パウロ書簡とほぼ同時代に書かれた資料を用いるべきであり、それ以降に書かれた資料を用いてアナクロニズムに陥ることがないように指摘する。この点で、Baur, Gunther, Schmithals, Georgiの歴史的再構成の方法論が批判の対象となる<sup>(27)</sup>。この基準は、歴史学の方法論として正しい。

第二に、パウロの論敵の資料として、しばしば用いられる他のパウロ書簡の並行箇所について、ただ単に類似表現である、ということだけで用いることは認めず、類似の文脈の中で用いられている類似表現のみを並行箇所の適切な使用として認める。こうして、Baur, Käsemann, Barrettをはじめ、多くの人々が用いた方法論が批判の対象となる<sup>(28)</sup>。しかし、その根拠として意味論的な視点を用いて、「同じ著者でも同じ言葉を違った文脈で違った意味で用いるからである」、という理由は妥当ではない。また、この基準は正しいが、狭い。同じ著者が同じ言葉を違った文脈の中でも同じ意味で用いることもあるからである。

第三に、あるパウロ書簡を第一次資料として用いた際に、ある箇所がパウロの論敵について言及している確実性と信頼性に関して、明示的言明、暗示的表現、主張という表現方法、論争的文脈、弁明的文脈、教示的文脈という文脈、手紙の始めの挨拶、導入の感謝の祈り、勧告的部分、手紙の結びの挨拶という書簡形式に分けて、確実性と信頼性の高い方から低い方へ等級づけて序列化する<sup>(29)</sup>。これは一見すると厳密な基準のようであるが、極めて機械的な分け方であり、人間の微妙な心の動きとそれに対応した表現を視野に入れておらず、正しくない。さらに、この研究書の方法論的吟味では、パウロ書簡に対する修辞学的表現への視点が欠落している。

パウロ書簡は最近の修辞学的批評が明らかにしてきたように<sup>(30)</sup>、アリストテレスの『修辞学』に代表されるアリストテレス的修辞学の伝統、ないしはアリストテレスの伝統をヘレニズム・ローマ期に受容したキケ

ロの『構想論』、偽キケロの『ヘレニウス宛修辞学』、クインティリアヌスの『弁論家の教育』によって代表されるキケロ的修辞学の伝統を受け継いでいるのである。このような修辞学のハンド・ブックの類を通して、古代ギリシア・ローマの修辞学の技法に精通することで、説得と弁明を意図したパウロ書簡の論理的展開が明らかになるばかりでなく、パウロのレトリックに惑わされることなく、真意に近づくことができると思われる。さらにまた、議論の相手を念頭に置いて、相手の議論に対して自分の見解を述べる「ディアトリバー」<sup>(31)</sup>という対話体で書かれた書簡で、とりわけ「修辞的疑問」<sup>(32)</sup>の中で対話の相手であるパウロの論敵の姿が明らかになり、それに対するパウロの見解の中で論敵に対するパウロの神学的主張も同時に明らかになると思われる。

以下では、パウロの論敵の思想と行動を第二コリント書10-13章のパウロの論敵の神学的思想と行動をテキストに則して明らかにすることを試みるが、論敵が自らの立場を主張したテキストが存在するのではないので、パウロが述べているテキストの中から浮かび上がってくる論敵の像を再構成することになる。従って、そこにはパウロの関心が偏っていたりする可能性や、パウロが論敵を誤解している可能性もないわけではなく<sup>(33)</sup>、論敵の正確な像の再構成には限界があることを予め知っておかなければならない。

#### 4. 第二コリント書10-13章における論敵の分析

以下では、第二コリント書10-13章に書簡理論的分析と修辞学的分析とを併せ用いて得られた書簡の構造と順序に従って<sup>(34)</sup>、そこに描かれた論敵の思想と行動を分析することにする。

##### (1) 序論 (Exordium, 10: 1-11)

パウロは「序論」で、真っ直ぐに議論に導く準備をする直接的な導入 (*προοίμιον*, *principium*) とは違って、論敵が聴衆を説得した後に、論敵の偏見や誤解を取り除き、その主張の核心を崩すための間接的な導入 (*ἐφ' ὁδοῦ*, *insinuatio*) を用いる<sup>(35)</sup>。その中に論敵の中心的思想が明らかにされる。

第一に、パウロの論敵はパウロが「肉に従って歩んでいる」(10: 2。I コリント 3: 3、「人間に従って歩んでいる」、比較) と見做している。このような批判によって、彼ら自身は「霊に従って歩んでいる」(12: 18、参照) ことを自負していたと思われる。これが論敵の主張の

核心である。それに対して、パウロは「肉にあって歩んでいるが、肉に従って戦っているのではない」(10:3)と述べ、「肉にあって」(ἐν σαρκί)と「肉に従って」(κατὰ σάρκα)という表現で用いる前置詞の区別を明確にして、論敵との身体論の違いを明確にする。すなわち、論敵は霊を強調するあまり、身体を軽視する二元論的思考をもっていたと思われる。さらに、パウロは武器と要塞の比喩を用いて(10:4-6)<sup>(36)</sup>、パウロの戦いが肉的なものではなく、霊的なものであることを明らかにし、パウロが「肉に従って」いる、という論敵の誤解と偏見を崩して、彼らと同様に「霊に従って」いることを示唆する。

第二に、論敵は自分たちが「キリストに属する者」と確信しているが、パウロはそうではない、と見做している(10:7b)。それに対して、パウロは彼らが「表面的なものを見ている」と反論し(10:7a)、パウロ自身も彼らと同様に「キリストに属する者」であることを認めるように主張する(10:7c)。ここにおいても、論敵がパウロを批判する根拠は、「霊に従って」いるか、「肉に従って」いるか、であると思われるが、パウロから見ると、彼らの霊的な基準は「表面的」な現象に限られていたことが示唆される。

第三に、「手紙は重々しく力強いが、側にいると体は弱々しく、話とはとるに足らない」(10:10)という論敵の言葉が直接に引用されている。そこでは、手紙の文体と比較して、パウロの演説には魅力がなく、それと関連したパウロの身体的な弱さが批判されている。ここにおいては、「自由で即席に行なわれる演説は霊の所有の証拠である」<sup>(37)</sup>というヘレニズム・ローマ期に広まっていた考えを考慮に入れると、パウロの論敵は演説が巧み(11:6、参照)であり、それが霊を所有している証拠である、と考えていたのである。また、彼らは、書かれた言葉と語られた言葉は違う、という二元論を前提にしていると思われる。これに対して、パウロは離れて手紙で書いた言葉と側にいて行なう行為(その中に演説も含まれる)とは一致する、と反論する(10:11)。

以上から明かなように、論敵の中心的な思想は“霊の所有”であり、それが最も端的に現れる現象として「演説」の巧みさを重視する<sup>(38)</sup>。また、それが霊的であるか否か、という基準であるばかりでなく、「キリストに属する者」(11:23、参照)であるか否か、という基準にもなっていたのである(13:3、参照)<sup>(39)</sup>。それに対して、パウロ自身は、「表面的」ではない、異なる基準を持っていたのである。問題は「霊的なもの」に対する解釈の違いである。

## (2) 命題 (Propositio, 10:12-18)

「命題」では、これから展開される議論の争点は何であるかが示されるが、議論の相手とパウロの間にある議論の争点の違いを明確にする中で、論敵の思想と行動が現される。そこで用いられる「比較」という概念は、称賛や非難のために用いられる修辞学的な概念であるが<sup>(40)</sup>、パウロと論敵の「比較」の中で論敵の姿が現される。

第一に、論敵は、パウロの直接的な評価によれば、「自分自身で自分自身を測り」「自分自身で自分自身を比較する」(10:12b。I コリント 2:13-15、参照)。すなわち、彼らは自分自身で同類かどうかを分類し、比較し合うのである<sup>(41)</sup>。ここにおいても、霊的であるか否かを、自分自身で分類でき、比較できる外面的な基準の存在が示唆される。このような彼らの態度は、「自分自身を推薦する」(10:12a)という自己推薦の問題となる。すなわち、霊的な基準に達していれば、自分自身を推薦できるのである。パウロは、このような自己推薦をする論敵と同類ではなく、また彼らと比較することを敢えてしない(10:12a)。

第二に、彼らは「限度を越えて誇る」(10:13a、15a)。具体的には、使徒会議でペトロを代表とするエルサレム教会とパウロを代表とするアンティオキア教会の間でユダヤ人宣教と異邦人宣教の領域を分けたが(10:13b。ガラテヤ 2:9、参照)、その領域を越えて侵入し(11:4、参照)、「他人の労苦によって」得られた成果をまるで自分の成果であるかのように「限度を越えて誇る」(10:15a)<sup>(42)</sup>。パウロはこれに対して、「神が私たちに割りとえられた領域という基準の領域に従って誇り」(10:13b)、「限度を越えて誇らない」(10:13a、15a)。

第三に、論敵の使徒の基準(*δόκιμος*, 10:18b)<sup>(43)</sup>は、パウロの目で見れば、「他人の基準で限度を越えて誇ること」(10:16)であり、それを一言で言えば「自分自身を推薦する人」(10:18a)である。それに対して、パウロは使徒の基準は、「主が推薦する人」(10:18c)であると反論する。

以上から明らかなように、論敵の究極的な問題は自己推薦であり、そのために他人の領域まで侵して限度を越えて「自分を誇る」ことをしていたのである。また、このような自己推薦をするためには、自己を他人と比較し、分類できる外面的な“霊の所有”の基準が前提にされるのである。



## (3) 陳述 (Narratio, 11: 1-15)

「陳述」では、議論の対象である論敵が、いかにコリントで問題の原因となったか、という経緯が語られる。ここでは「愚か者」として語る、という修辞学の「アイロニー」<sup>(44)</sup>を用いた方法で語られるが、論敵の宣教活動 (11: 1-6)、パウロの経済活動への批判 (11: 7-11)、論敵に対するパウロの批判 (11: 12-15) という段落に分けて論敵の叙述を分析する。

## a. 論敵の宣教活動 (11: 1-6)

第一に、パウロは、コリント人に宣教したことを、比喩的に「処女をキリストという一人の男に嫁がせた」と述べる。しかし、論敵がコリント人をパウロの言葉から引き離したことを「蛇がエヴァを欺いたように」、論敵は「悪賢さ」(11: 3。4: 2、12: 16、参照)によって、コリント人を誘惑した、と天地創造の物語を用いて寓喩的に語る。すなわち、論敵は狡猾な「蛇」(11: 3。11: 14、「サタン」、11: 15、「サタンの使い」、参照)に喩えられているのである。

第二に、彼らは「やって来ている人」<sup>(45)</sup>(11: 4)と表現され、コリントの共同体に属する人物ではなく、コリントの共同体への侵入者であることが明らかにされる(11: 15、「他人の労苦によって」、参照)。そして、彼らはパウロから見ると「他のイエス」「異なる霊」「異なる福音」(11: 4)を宣教した。とりわけ福音の中心を成す「イエス」と「霊」に関して、「他のイエス」「異なる霊」という表現から、論敵のイエス理解と霊の理解がパウロと全く違っていたことが明らかである(12: 18、「同じ霊に従って歩んだのだろうか」、参照)。

第三に、彼らはパウロが「大使徒たちよりも劣っている」と見做す。具体的には「話は素人である」と判断して、演説において「劣っている」と見下していた(10: 10、参照)と思われる。すなわち、彼らは“霊の所有”を誇り(10: 2、参照)、その現れである演説を重視していたのである(13: 3、参照)。それに対して、パウロは「言葉」においてではなく、「知識」においては劣っていない、と反論する(11: 6)。ここでパウロと比較されている「大使徒」とは誰か、「偽使徒」(11: 13)と同一人物であるのか否か、という点が議論されてきた。「大使徒」は修辞学的な表現ではあるが<sup>(46)</sup>、パウロの「大使徒」と「偽使徒」に対する価値評価が異なり、明らかに違う対象を指しており、「大使徒」とはエルサレムの「柱と目される」(ガラテヤ2: 9、6、参照)指導層で

ある「ヤコブ、ケファ（＝ペトロ）、ヨハネ」を指している、と思われる<sup>(47)</sup>。

以上から、論敵はコリントの共同体への侵入者であり、「他のイエス」と「異なる霊」を内容とする「異なる福音」を宣教し、特に「霊」の現れである「演説」を重視していたと思われる。

#### b. パウロの経済活動に対する批判（11：7－11）

第一に、パウロは無償で福音を伝えたことが、「罪を犯したのだろうか」（11：7）と修辭的疑問で論敵の批判を前面に出し、それに対して答える。ここには、教会の献金を受け取らずに、自給自足の生活をするパウロのユニークな宣教活動に対する痛烈な批判が見られる。すなわち、パウロがコリントの教会から支援を受けて、パトロソ（保護者）＝クライアント（被護者）関係に入ること拒んだのを「罪を犯した」と言ってパウロを責めたと思われる<sup>(48)</sup>。それに対してパウロは、コリント人に仕えるために、足りない所は諸教会から「奪い取った」（11：8）と強いアイロニーを込めた表現で答え、具体的にはマケドニアの兄弟が不足を補ってくれたことを明らかにする（フィリピ4：15、参照）。

第二に、パウロは、「私はあなたがたを愛していないのだろうか」（11：11）と修辭的疑問で論敵の批判を前面に出して、それに対して再度答えようとするが、「神がご存じです」と一言だけ述べる。ここから明らかのように、論敵は教会の支援を拒んだパウロに対して「愛がない」と批判していたと思われる。パウロが自給自足の生活をして、コリント人に負担をかけないようにしたのは、愛の表現であったのであるが（12：15、参照）、誤解されたのである。

以上のパウロの経済活動に対する批判は第一コリント書（9章）から一貫して続いているものであり、第二コリント書10－13章の論敵に特徴的な現象ではない。第二コリント書10－13章の論敵も引き続きパウロの自給自足の宣教を批判していたのである。

#### c. 論敵に対するパウロの批判（11：12－15）

第一に、パウロは、論敵が「偽使徒」であり、「キリストの使徒」に変装している、と言う（11：13）<sup>(49)</sup>。すなわち、彼らは「キリストの使徒」と自称していたのであるが、パウロの立場から見ると「偽使徒」なのである。尚、「使徒」という概念は、ある使命のために派遣した者の代理である「派遣された者」という意味であるが、パウロは「十二使徒」

に限らず広い範囲で用いている（8：23、I コリント 9：5、12：28、フィリピ 2：25、ローマ 16：7、参照）<sup>(50)</sup>。

第二に、パウロは論敵を「悪い働き人」（11：13。フィリピ 3：2、参照）と呼んでいる。ここから、彼らは使徒や教師という意識を持った「働き人」という自覚を持ってした宣教者であったと思われる。あるいは、パウロよりも「良い働き人」という意識をもっていたのかもしれない。

第三に、パウロは論敵について「サタンに仕える人」が「義に仕える人」に変装している、と批判する（11：15）。すなわち、彼らは「義に仕える人」（11：23、「キリストに仕える人」、参照）と自称していたが、パウロは彼らが実は「サタンに仕える人」である、と厳しい評価を下しているのである。

以上から、論敵は「キリストの使徒」「（良い）働き人」「義に仕える人」であると自認し、自称していたと思われる<sup>(51)</sup>。

#### （4）論証（Probatio, 11：16-12：10）

論証では、相手の批判に対して自分の立場を確立するために、証明を用いて議論する。このような相手の批判的な議論の中に論敵の思想と行動が映し出される。パウロは論敵の批判の中心である使徒性について自分の立場を弁護する論証を試みるが、それは序論（11：16-21）、「苦難のリスト」を用いて苦しみという点では論敵以上であることを明らかにする第一証明（11：22-29）、「弱さを誇る」点で論敵との違いを明らかにする第二証明（11：30-12：9）、さらに結論（12：10）に分けられる。

##### a. 序論（11：16-21）

第一に、パウロはアイロニーを用いて「愚か者になって誇る」という手段を取る際に、「多くの人が肉に従って誇っているので、私も誇ろう」（11：18）と述べるが、論敵はこの「多くの人々」の中に数えられ、また多数派に影響を与えていた存在であると思われる。すなわち、論敵は外面的で人間的な事柄を誇っていたと思われる。

第二に、「あなたがたは賢いにもかかわらず、喜んで愚か者たちに我慢している」（11：19）と述べる中で、論敵の影響を受けたコリント人が「賢い」（*φρόνιμος*）と自認していたことが明確である（I コリント 4：10、10：15、参照）。すなわち、ここから論敵が「賢い」ことを誇って

いたことが示唆され、外面的で人間的な事柄を誇ることは、パウロから見れば「愚か」であるが、彼らの基準では「賢い」と評価される事柄であったことが推測される。

第三に、「ある人があなたがたを隷属させ、食い尽くし、奪い、取り上げ、あなたがたの顔を殴っても、あなたがたは我慢している」(11:20)という状況描写の中で、「ある人」とは婉曲的に論敵を指す言葉であり、パウロの目から見ると、論敵がコリントの共同体に多大な悪影響を与え、暴力的に支配して、搾取しているのである。

以上から明らかなように、論敵は「肉に従って」外面的で人間的な事柄を誇り、「賢い」ことを誇り、このような価値観でコリントの共同体を支配し、また支援を得るために献金を要請していたと思われる。

#### b. 第一証明 (11:22-29)

第一に、パウロは論敵が「ヘブライ人であるのか」「イスラエル人であるのか」「アブラハムの子孫であるのか」と三度修辭的疑問を繰り返す。それに対して「私もそうである」を三度繰り返して反論する(11:22、フィリピ3:5、参照)。すなわち、彼らは血統的に見て純粋なユダヤ人であることを誇っていたのである<sup>(52)</sup>。これが彼らが誇る外面的で人間的な事柄の核心の一つである。

第二に、パウロは「彼らはキリストに仕える人であるのか」という修辭的疑問をさらに畳みかけ、「気が変になったように言うが、私は彼ら以上にそうである」(11:23a)と答えて、「苦難のリスト」(11:23b-29)で苦しみを数え上げ、彼らに優ることを示す。すなわち、論敵は「キリストに仕える人」<sup>(53)</sup>であると自認していたことが明らかである(11:15、参照)。しかし、彼らの「キリストに仕える人」としての誇りは、キリストと「苦しみを共にする」というパウロの内面的な誇りと異なり、外面的で人間的な事柄であったことが推測される(5:16、参照)。これが彼らの誇る外面的で人間的な事柄のもう一つの核心であったと思われる。

#### c. 第二証明 (11:30-12:9)

第一に、パウロは「誇らなければならないなら、弱さを誇ろう」(11:30、12:5、9、参照)と述べて「弱さを誇る」が、アイロニーを用いて「愚か者」として「強いられて誇る」言葉の中に、パウロとは対照的に「自発的に誇り」「強さを誇る」論敵の姿が示唆される。

第二に、パウロが「限度を越えて誇る」(10:13、15、参照)ことがないようにするために、まるで他人の経験であるかのように三人称を用いて「第三の天」に挙げられた「幻と啓示」の経験を語る(12:2-4)。これは論敵が、霊的経験として「幻と啓示」を語り、誇っていたことを示唆する。すなわち、パウロは彼らの「強さを誇る」霊的経験においても彼らに劣ることがないことを証明しようとしたのである。

第三に、パウロは否定的に語る「第三の天」にまで挙げられた経験とは対照的に、「肉体の刺」という「弱さ」の経験の中で、神の恵みが十分であり、神の「力は弱さの中で完全に現される」ことを見い出す(12:7-9)。反対にここにパウロとは対照的に、肉体を軽視した論敵の姿が示唆される。

以上から、論敵は霊的な経験として「幻と啓示」を見ることを強調し、それを「強さ」として誇っていたと思われる。

#### d. 結論(12:10)

パウロは「弱さ」と「苦難のリスト」の要約を結び合わせ、それらが「キリストのため」であると結論づける。すなわち、パウロにとって「キリストに仕える人」という使徒的な基準は、キリストの「弱さ」と「苦しみ」に与かることである。そして最後に、「私は弱い時にこそ、強い」という逆説的な言葉で結ぶ。ここから反対に、論敵の「キリストに仕える人」の基準が「強さ」にあることは明らかである(13:10、「私たちは弱く、あなたがたは強い」、参照)。

#### (5) 反駁(12:11-21)

論証では自分の立場を弁護するのに対して、反駁では相手の立場を崩すことを目的として議論を展開する。このように相手を反駁する議論の中に論敵の思想と行動が浮かび上がってくる。ここでは主に論敵の使徒的基準への反論(12:11-13)、経済的非難への反論(12:14-18)、コリントの共同体への反論(12:19-21)という内容で構成されているが、順を追って見ていきたい。

##### a. 論敵の使徒的基準への反論(12:11-13)

第一に、パウロが論敵と同じように自分を誇り、「愚か者」として苦しみの経験と弱さを誇ることを語り終えた後に、「あなたがたから推薦されるべきであった」(12:11)と述べていることから、彼らが自分を

誇るのは「自分自身を推薦する」ためであったことが明らかである（10：18、参照）。

第二に、パウロは「使徒のしるし」として「あらゆる忍耐の中で」キリストの苦しみと弱さに与かった経験を語るのであるが、それは論敵の「使徒のしるし」である「しるしや奇跡や力ある業」と同格であると位置づける（12：12）<sup>(54)</sup>。

第三に、コリントの共同体が他の教会から劣る点として、パウロが経済的負担を掛けなかったことを「この不正を許してほしい」（12：13）とパウロは謝るが、この言葉の中に、論敵がパウロの自給自足の宣教を「不正」と非難していたことが明らかである（11：7、「罪を犯す」、参照）。

以上から、論敵が「しるしや奇跡や力ある業」を「使徒のしるし」としており、またその「しるし」を行なう力があることを誇り、使徒として「自分を推薦する」ことに力点をおいていたこと、またパウロの経済活動を「不正」と批判していたことが分かる。

#### b. 経済的非難への反論（12：14-18）

第一に、パウロはコリントの共同体から援助を受けずに、自給自足の経済活動をしたことを、親子の比喻を用いて、子が親のために貯蓄しなければならないのではなく、親が子のために貯蓄しなければならないのである、と反論する（12：14-15a）。すなわち、コリントの共同体の創始者であるパウロがパトロンであり、コリント人はクライアントであることを論敵に対して指摘する。ここから明らかなように、論敵はパウロに対してパトロンである、という意識を持っていたと思われる<sup>(55)</sup>。

第二に、「私はあなたがたを愛すれば愛するほど、ますます愛されなくなるのだろうか」（12：15b）という修辭的疑問には、論敵がパウロの無償の愛の行為を誤解してパウロを非難し、パウロと共同体の間の愛の関係が壊れていることが反映されている。

第三に、パウロはコリントの共同体に経済的な負担をかけなかったのに、「悪賢くて、あなたがたからだまし取ったのだろうか」（12：16）という修辭的疑問には、論敵の非難の言葉が反映されている。すなわち、彼らは聖なる貧しい人々への募金活動を悪意をもって非難していたのである。パウロはそれが事実無根であることを修辭的疑問を畳掛けて否定し、このように非難することが「同じ霊に従って歩んだのだろうか」（10：2、参照）「同じ足跡を（歩んだのだろうか）」と論敵に対して

疑問を呈する（12：17-18）。

以上から、論敵はパトロンの、という意識を持ち、パウロの自給自足の経済活動と無償の宣教活動の中傷誹謗し、募金活動を悪意を持って非難していたことが分かる。

### c. コリントの共同体への反論（12：19-21）

第一に、「私があなたがたに対して自分を弁明していると再びあなたがたは思っているのか」（12：19a）という修辭的疑問で、“悲しみの訪問”（2：3、4）の滞在時に（11：21、「再び」、参照）、コリントの共同体がパウロに対して「自分を弁明している」と批判したことを想起させる。しかし、パウロここでは自己弁護ではなく、コリントの共同体を建て上げるために「キリストにあつて神に語っている」（12：19b）と反論する。すなわち、神への弁明であり、神への証言であることを明らかにする。

第二に、パウロはコリントを訪問すると、コリントの共同体が悪徳表を用いた表現を要約すると「肉なるもの」であることを見出し、“悲しみの訪問”の時の二の舞となることを恐れる（12：20-21）。ここには「霊に従って歩んでいる」と自覚している論敵に対して、彼らの主張と反対の行動をしていることに対するパウロの批判が見られる。

以上から、論敵は自分たちが「霊に従って歩んでいる」という立場からパウロの自己弁護を批判していたと思われる。

### （6）結論（13：1-10）

「結論」では、議論の要旨が繰り返され、最後に行動に促す言葉が語られるが、パウロの要約した言葉の中に論敵の使徒の基準（10：18、参照）が現される。

第一に、「あなたがたは私の内でキリストが語っている証拠（δοκιμή）を求めている」（13：3a）とパウロは論敵の影響下にあるコリント人に対して語る。すなわち、論敵の最も重要な使徒の基準は、演説の中で「キリストが語っている」か否か、というものであった。これは霊の現れとして考えられていた演説が霊的であるか否かを決める際に重要な要点であった。

第二に、キリストは「あなたがたに対して弱くはなく、あなたがたの中で強い」（13：3b）、とパウロは論敵に対して述べる。このような主張は、論敵が「強さ」を誇る「強さ」の神学を展開していたことを示し

ている。それに対して、パウロは「キリストが弱さの中で十字架につけられ、神の力の中で生きている」と同じように、私たちもキリストと共に「弱い」が、キリストと共に「神の力の中で」生きている（12：4）、とキリストを模範とした「弱さ」の神学を展開する。すなわち、パウロの使徒の基準は肉体的な「弱さ」の中で「神の力」が働く「イエス・キリストがあなたがたの内にいる」か否か、である。

第三に、パウロは最後に「共同体の回復」（13：9、11）を祈り求め、共同体を破壊するためではなく、共同体を建設するために与えられた「使徒の権威」を厳しく用いることがないように願う（13：10）。ここから明らかなように、パウロの立場から見ると、論敵は共同体を破壊する行動に出ていたのである。

以上から明らかなように、論敵にとっては演説において「キリストが語っている」ことが使徒的基準であり、それに対して、パウロはキリストの十字架と復活に「共に」与かる、人間的な「弱さ」と神の力の「強さ」を対比した「弱さ」を特徴としていた。

## 5. 第二コリント書10-13章における論敵の思想と行動

以上の分析結果を、以下では論敵の自己認識、論敵の神学思想、論敵の宣教活動、という三つの点で纏めることにする。

### a. 論敵の自己認識

まず始めに、第二コリント書におけるパウロの論敵は、ある場合には「ある人」（10：7、11：20、21）「そういう人」（10：11）「やって来ている人」（11：4）<sup>(56)</sup>「彼（＝サタン）に仕える人」（11：15）と単数形で表現されている。しかし、残りのほとんどの場合には「ある人々」（10：2、12。3：1、参照）「そういう人々」（11：13）「多くの人々」（11：18。2：17、参照）「機会を狙っている人々」（11：12）「大使徒（複数形）」（11：5、12：11）「偽使徒（複数形）、悪い働き人（複数形）、キリストの使徒（複数形）」（11：13）「義に仕える人（複数形）」（11：15）「ヘブライ人、イスラエル人、アブラハムの子孫（複数形）」（11：22）「キリストに仕える人（複数形）」（11：23）と複数形で書かれている。しかし、パウロは厳密に単数形と複数形を描き分けているのではないことは、同一の対象に対して単数形と複数形が同時に用いられていることから明らかである（10：2、7、12；10：11、12；11：13-15、参照）。



次に、論敵の自己認識について纏めると、彼らは、自分たちが「ヘブライ人、イスラエル人、アブラハムの子孫」(11:22, 'Εβραῖοι, Ἰσραηλίται, σπέρμα Ἀβραάμ)と自己認識し、人種的に見てユダヤ人であることを誇っていた。さらにその上で、「キリストに属する者」(10:7, Χριστοῦ εἶναι)であるばかりか、「キリストの使徒」(11:13, ἀποστόλοι Χριστοῦ)「キリストに仕える人」(11:23, διάκονοι Χριστοῦ)「義に仕える人」(11:15, διάκονοι τοῦ δικαιοσύνης)「働き人」(11:13, ἐργάτης)であり、キリスト教の宣教者であると自称して誇っていたが、パウロからは「偽使徒、悪い働き人、サタンに仕える人」(11:13, 15, ψευδαπόστολοι, ἐργάται ὁδοί, διάκονοι Σατανῶν)と酷評されている。彼らはコリントに「やって来ている(人)」(ὁ ἐρχόμενος)キリスト教の宣教者であり、彼らも「イエス、霊、福音」を伝えたが、パウロから見れば、それはパウロが伝えたのとは違う「他のイエス、異なる霊、異なる福音」(ἄλλος Ἰησοῦς, πνεῦμα ἕτερον, εὐαγγέλιον ἕτερον)であった(11:4)。

#### b. 論敵の神学思想

論敵は、パウロが「キリストに属する者」(10:7)ではなく、またパウロが使徒であることを疑う彼らの使徒的基準は「肉に従って歩んでいる」(κατὰ σάρκα περπατεῖν)のではなく「霊に従って歩んでいる」(κατὰ πνεῦμα περπατεῖν)であった(10:2)。すなわち、彼らが最も重視していたのは、“霊の所有”であった。しかし、パウロにとっては、これは「異なる霊」(11:4)であった。

まず最初に、論敵は“霊の所有”が自由で即興的で巧みで説得的な「演説」に現れると考えていた。すなわち、論敵にとって“霊を所有”している「確証」(δοκιμή)は、「キリストが語っていること」(13:3, Χριστός λαλεῖν)であった。しかし、この点において、パウロは「話とはとるに足らない」(10:10, ὁ λόγος ἐξουθενημένος)と批判され、「話は素人である」(11:6, ἰδιώτης τῷ λόγῳ)と評価されていた。

次に、論敵は「使徒のしるし」(12:12a, τὰ σημεῖα τοῦ ἀποστόλου)が「しるしや奇跡や力ある業」(12:12b, τὰ σημεῖα τε καὶ τέρατα καὶ δυνάμεις)にあると考えていた。これに対してパウロにとって「使徒のしるし」は、「あらゆる忍耐の中に」与かることであり、具体的には「苦しみ」に与かることである、と考えていた。さらに、彼らは「幻や啓示」(12:1, ὁπτασίαι καὶ ἀποκαλύψεις)を見ることが“霊の所有”を現している経験であると考えて、それを誇っていたが、それに対して

パウロは「弱さ」に与かった経験を誇る。すなわち、パウロにとっては、「使徒のしるし」は、キリストと共に「苦しみ」と「弱さ」に与かることであった（13：4、参照）。

### c. 論敵の宣教活動

以上のように、論敵は「霊」を強調した「イエス」と「福音」を伝えたが、彼らは異邦人宣教に割り当てられた領域に侵入して、コリントに「やって来ている人」であり、「他人の労苦によって」得られた成果を自分のものであるかのように「限度を越えて誇る」（10：13、15）人であった。また、彼らは外面的な“霊の所有”を誇り（11：18、参照）、「自分自身で自分自身を測り、自分自身で自分自身を比較し」（10：12）、「自分自身を推薦する」こと（10：18、12：11、参照）、すなわち自分自身を誇ることに関心を注いでいた。それは彼らの使徒性の「確証」でもあった（10：18）。

そして、彼らはコリントの共同体に多大な悪影響を与え、パウロによって与えられた「純粋さ」から人々の心を引き離し（11：2－3、参照）、コリントの共同体を隷属化させ、搾取するかのように経済的な支援を要求していた（11：20、参照）。それとは反対に、自給自足の経済的生活をして、無償で福音を宣教するパウロを非難し（11：7－21、参照）、エルサレムの貧しい聖徒のための募金活動をも中傷誹謗していたのである（12：16－18、参照）。

## 6. 終わりに

第二コリント書10－13章におけるパウロの論敵の中心的思想を要約すると、彼らは「演説」「奇跡」「幻」などの外面的な“霊の所有”を使徒的基準に据えた「栄光の神学」<sup>(57)</sup>、または強さを誇る霊的な「力（*δυναμεις*）の神学」<sup>(58)</sup>を展開していたのである。それに対してパウロは、時間と空間を越えて十字架のキリストと一体となる、という内面的な「霊」の理解に基づいて、キリストの「苦しみ」と「弱さ」に共に与かる「十字架の神学」<sup>(59)</sup>あるいは「弱さ（*ασθενεια*）の神学」<sup>(60)</sup>を展開しているのである。ここにおいて、論敵の「イエス」理解、また「福音」理解は、「霊」と「肉」を分け、しかも「霊」を重視する二元論的な人間理解を前提にし、それに対してパウロは自分の体における「苦しみ」と「弱さ」に焦点を当て、そこに働く霊的な「神の力」を見、「霊」と「肉」を一致させた一元論的な人間理解を前提にする。すなわち、議論

の焦点となっているのは「霊」の理解と共に身体論なのである。この点では、第二コリント書10-13章におけるパウロの論敵は、第一コリント書におけるパウロの論敵と並行関係が見られ、霊的熱狂主義者あるいはSchmithalsによって代表される「グノーシス主義者」に近い。しかし、コリントの共同体の内部者である第一コリント書における論敵と侵入者である第二コリント書10-13章における論敵は異なり、また“霊の所有”を強調する点においては両者は類似性が見られるが、「霊」の現れとして、「演説」「奇跡」「幻」などを強調する点は、第一コリント書における論敵には見られない新しい要素である。

他方、第二コリント書におけるパウロの論敵は、「ヘブライ人、イスラエル人、アブラハムの子孫」であることを誇り、異邦人宣教の領域に侵入してきた者であり、エルサレムの「大使徒」と比較をする点から、彼らがパレスチナのキリスト教と密接な関係を持つユダヤ人キリスト教徒であったことは確かであると思われる。この点においては、第二コリント書1-9章におけるパウロの論敵と極めて近親性があると思われる。しかし、第二コリント書1-9章におけるパウロの論敵は、コリントの共同体の内部者である「不正を行なった者」(7:14)という一人の問題と密接に関連し、複数の侵入者によって引き起こされた10-13章の問題とは深い関連はあるが、一応別の問題であると思われる。さらに、Käsemannが主張するように彼らがエルサレムから派遣された使徒たちであったかどうか、またBarrettらが主張するように「ユダヤ主義者」であったかどうかは、それらの可能性は高いのであるが、テキストからは読み取ることはいできない。さらに、彼らがユダヤ人キリスト教徒であって、しかも“霊の所有”を強調しているからと言って、Georgiらのように「ヘレニズムの『神の人』」との並行関係を見いだすのは、テキストへの読み込み過ぎである。

以上のように、第二コリント書10-13章におけるパウロの論敵は、“霊の所有”を強調する「霊能者」(πνευματικοί)で、パレスチナのキリスト教と密接な関係を持つユダヤ人キリスト教徒、という二つの要素を併せ持った人々であった。それは、「エルサレムから派遣された霊能者」というKäsemannの説に近いが、「エルサレムから派遣された」点は、先に述べたように可能性は高いが不詳である<sup>(61)</sup>。尚、論敵はMarshallが指摘するように「高慢な人」であったことは、彼らの誇る態度から明らかであるが、それは第一コリント書の論敵と共通する(1コリ4:6, 18, 19, 5:2, 8:1, 13:4)。

## 註

\*本稿は1999年9月17日に金城学院大学で開催された第39回日本新約学会で、拙論「第二コリント書10-13章の書簡理論的・修辞学的分析」(その後、『ペディラヴィウム』(原始キリスト教とヘレニズム文庫紀要)第50号(1999年)、1-25頁、所収)を発表した際に、明治学院大学の加山久夫教授から出された、「第二コリント書10-13章におけるパウロの論敵の明確な像を示すとどうなるのか」という趣旨の質問に答えるものである。この問題は、当日発表した問題と密接に関連するが、それとは別な大きな問題であり、質疑応答の場でテキストから見られる論敵の全体像の要点を口頭で答えたが、本稿はその要点を補って詳細に展開したものである。加山教授をはじめ、その場での質疑に心から感謝したい。尚、本稿で用いる第二コリント書のテキストは全て私訳である。

- (1) F.C.Baur, "Die Christuspartei in der korinthischen Gemeinde, der Gegensatz des petrinischen und paulinischen Christentum in der ältesten Kirche, der Apostel Petrus in Rom," *Tübingen Zeitschrift für Theologie* 4 (1831), 61-206, =in, idem (K.Scholder [Hg.]), *Ausgewählte Werke in Einzelausgaben*, 1.Bd, Stuttgart: Frommann, 1963, 1-164; idem, *Paulus, der Apostel Jesu Christi. Sein Leben und Wirken, seine Briefe und seine Lehre: Ein Beitrag zu kritischen Geschichte des Urchristentums* (2. Aufl. 2 Bde. E.Zeller [Hg.], Leipzig, 1866/67), =ET, *Paul, The Apostle of Paul of Jesus Christ: His Life and Work, His Epistles and Doctrine* (2 ed. 2 vols.), London: Williams & Norgate, 1876.
- (2) *Contra*, F.C.Baur (cf.n.1), W.Lütgert (cf.n.14), A.Schlatter (cf.n.15), R.Bultmann (cf.n.17), W.Schmithals (cf.n.18).
- (3) 第二コリント書がいくつかの手紙で構成されている、という見解は研究者の間ではほぼ一致が見られるが、それがいくつの手紙で構成され、どのような順序で書かれたのか、という問題に対しては、意見の一致を見ていない。1-9章が複数の手紙ではなく、一つの手紙である、という説を修辞学的批評の視点から述べた新しい見解については、山田耕太「第二コリント書1-9章の書簡理論的・修辞学的分析」『教と学園大学研究紀要』第8号(1999年)、1-32頁; K.Yamada, "Epistolary Theoretical & Rhetorical Analyses of 2 Cor.1-9," *Annual of the Japanese Biblical Institute* 24 (1998), 83-116, 参照。さらに、第二コリント書1-9章が一つの手紙である、という立場から、1-9章と10-13章がどちらが先に書かれたのか、という問題を含む、1-9章と10-13章の関係については、別の機会に詳しく議論する予定である。
- (4) 第二コリント書におけるパウロの論敵について、10-13章に限って論じている研究は、註21を参照。以下では、その他の文献については、第二コリント書10-13章の議論を中心にして取り上げる。
- (5) Cf. C.K.Barrett, "O' ADIKHSAS (2 Cor.7.12)," in, O.Bocher

- & K.Haacker (eds.), *Veriborum Veritas: Festschrift für Gustav Stählin*, Wuppertal: Theologischer Verlag Rolf Brochhaus, 1970, 149-157, =idem, *Essays on Paul*, London: SPCK, 1982, 108-117; H.D.Betz, *Der Apostel Paulus und die sokratische Tradition: Eine exegetische Untersuchungen zu seiner "Apologie" 2 Korinther 10-13*, Tübingen: J.C.B.Mohr, 1972, bes.13.
- (6) 山田耕太「第二コリント書10-13章の書簡理論的・修辞学的分析」、参照。
- (7) 研究史の概要は、注解書、研究書、研究論文の冒頭にしばしば断片的に述べられているが、最近のものでは以下に詳しい。Cf. J.L.Sumney, *Identifying Paul's Opponents: The Question of Method in 2 Corinthians*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1990; R.Bieringer, "Die Gegner des Paulus im 2. Korintherbrief," in, R.Bieringer & J.Lambrecht, *Studies on 2 Corinthians*, Leuven: Leuven Univ. Press, 1994, 181-221. ただし、J.L.Sumneyの研究書とR.Bieringerの論文を比較すると、前者より後者の方が研究対象の範囲がはるかに広く徹底している。しかし、前者は、方法論的吟味がなされており、後者よりも包括的であるが、最近の新約学の新しい潮流の一つである修辞学的批評の成果を取り入れる試みがなされていない。
- (8) Sumney, *Identifying*, 15-42, 194-202; Bieringer, "Die Gegner," 193-199, 218.
- (9) C.K.Barrett, "Christianity at Corinth," *Bulletin of the John Rylands Library* 46 (1964), 269-297, =idem, *Essays on Paul*, 1-27; idem, "PSEUDAPAPOSTOLOI (2 Cor.11.13)," in, A.Descamps & A.de Halleux, *Mélanges Biblique en Hommage au R.P.Beda Rigaux*, Gembloux: Ducult, 1970, 377-396, =idem, *Essays on Paul*, 87-107; idem, "Paul's Opponents in 2 Corinthians," *NTS* 17 (1971), 233-254, = idem, *Essays on Paul*, 60-86; cf. idem, "Cephas and Corinth," in O.Betz, M.Hengel & P. Schmidt (Hg.), *Abraham unser Vater: Juden und Christen im Gespräch über die Bibel*, Leiden: Brill, 1963, 1-12, = idem, *Essays on Paul*, 28-39.
- (10) J.J.Gunther, *St. Paul's Opponents and Their Background: A Study of Apocalyptic and Jewish Sectarian Teachings*, Leiden: Brill, 1973.
- (11) G.Lüdemann, *Paulus, der Heidenapostel, Band II: Antipaulinismus im frühen Christentum*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1983.
- (12) Sumney, *Identifying*, 43-48, 202-203; Bieringer, "Die Gegner," 200-204, 218.
- (13) W.Bousset, *Hauptproblem der Gnosis*, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1907, bes.196 n.1, 242, 314.
- (14) W.Lütgert, *Freiheitspredigt und Schwarmgeister in Korinth*, Gütersloh: Bertelsmann, 1908.

- (15) A.Schlatter, *Die korinthische Theologie*, Gütersloh: Bertelsmann, 1914.
- (16) R.Reizenstein, *Die hellenistischen Mysterienreligion*, (3 Aufl.) Stuttgart: Teubner, 1927, bes.333-425.
- (17) R.Bultmann, "Exegetische Probleme des zweiten Korintherbriefes," *Symbolae Biblicae Upsalienses* 9 (1947), 3-31, =in, idem, *Exegetica*, Tübingen: J.C.B.Mohr, 1967, 298-322.
- (18) W.Schmithals, *Die Gnosis in Korinth: Eine Untersuchung zu den Korintherbriefen* (3. Aufl.), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1969 (1956).
- (19) Sumney, *Identifying*, 49-61, 203-205; Bieringer, "Die Gegner," 204-208, 218.
- (20) D.Georgi, *Die Gegner des Paulus im 2. Korintherbrief: Studien zur Religiösen Propaganda in der Spätantike*, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1964, =ET, idem, *The Opponents of Paul in Second Corinthians*, Philadelphia: Fortress Press, 1986.
- (21) G.Friedrich, "Die Gegner des Paulus im 2.Korinther," in, O.Betz, M.Hengel & P.Schmidt (Hg.), *Abraham unser Vater*, 181-215.
- (22) Sumney, *Identifying*, 63-67, 205-206; Bieringer, "Die Gegner," 208-212, 218.
- (23) E.Käsemann, "Die Legitimität des Apostels: Eine Untersuchung zu II Korinther 10-13," *ZNW* 41 (1942), 33-71, =in, K.H.Rengstorf (Hg.), *Das Paulusbild in der neueren deutschen Forschung*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1969, 475-521.  
 尚、第二コリント書におけるパウロの論敵の問題を、以下は10-13章に限定して論じている。Cf.Käsemann, "Die Legitimität"; Barrett, "Paul's Opponents,"; Sumney, *Identifying*, 149-179, 227-238.
- (24) Bieringer, "Die Gegner," 212-215, 218.
- (25) R.P.Marshall, *Enmity in Corinth: Social Convention in Paul's Relation with the Corinthians*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1987.
- (26) N.A.Dahl, "Paul and the Church at Corinth according to I Corinthians 1.10-4.21," in, W.R.Farmer, C.F.D.Moule & R.Niebuhr (eds.), *Christian History and Interpretation*, Cambridge: Cambridge Univ.Press, 1967, 315-335; C.A.J.Hickling, "Is the Second Epistle to the Corinthians a Source for Early Church History?" *ZNW* 66 (1975), 284-287; R.McL.Wilson, "How Gnostic Were the Corinthians?" *NTS* 19 (1972/73), 65-74; K.Berger, "Die impliziten Gegner: Zur Methode des Erschliessens von 'Gegner' in neutestamentlichen Texten," in, D.Lührmann & G.Strecker (Hgg.), *Kirche: Festschrift für G.Bornkamm zum 75.Geburtstag*, Tübingen: J.C.B.Mohr, 1980, 373-400.

- (27) Sumney, *Identifying*, 77-86, 206-210.
- (28) Sumney, *Identifying*, 87-94, 210-212.
- (29) Sumney, *Identifying*, 95-113, 212-215.
- (30) Cf. D.W. Watson (ed.), *Persuasive Artistry: Studies in New Testament Rhetoric in Honor of George A. Kennedy*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1990; S.E. Porter & T.H. Olbricht (eds.), *Rhetoric and the New Testament: Essays from the 1992 Heidelberg Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994; S.E. Porter & T.H. Olbricht (eds.), *Rhetoric, Scripture & Theology: Essays from the 1994 Pretoria Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1996; S.E. Porter & T.H. Olbricht (eds.), *Rhetorical Analysis of Scripture: Essays from the 1995 London Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1997; S.E. Porter & D.L. Stamps, *The Rhetorical Interpretation of Scripture: Essays from the 1996 Malibu Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1999.
- (31) Cf. R. Bultmann, *Der Stil der paulinischen Predigt und die kynisch-stoische Diatribe*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1910; S.K. Stowers, *The Diatribe and Paul's Letter to the Romans*, Chico: Scholars Press, 1981; T. Schmeller, *Paulus und "Diatribe": Eine vergleichende Stilinterpretation*, Münster: Aschendorf, 1987.
- (32) Cf. W. Wuellner, "Paul as Pastor: The Funktion of Rhetorical Questions in First Corinthians," in A. Vanhoye (ed.), *L'Apôtre Paul: Personnalité, style et conception du ministère*, Leuven: Leuven Univ. Press, 1986, 49-77; D.E. Watson, "1 Corinthians 10:23-11:1 in the Light of Greco-Roman Rhetoric: The Role of Rhetorical Questions," *JBL* 108 (1989), 301-318.
- (33) Sumney, *Identifying*, 84-85.
- (34) 註6、参照。
- (35) E.W. Bower, "Ephodos and Insinuation in Greek and Latin Rhetoric," *Classical Quarterly* 8 (1958), 224-230.
- (36) J.A. Malherbe, "Antisthenes and Odysseus, and Paul at War," *HTR* 76 (1983), 143-173.
- (37) Reizenstein, *Mysterienreligion*, 362.
- (38) Schmithals, *Die Gnosis*, 155-168.
- (39) Schmithals, *Die Gnosis*, 186-188.
- (40) Betz, *Tradition*, 119-120; C. Forbes, "Comparison, Self-Praise and Irony: Paul's Boasting and Convention of Hellenistic Rhetoric," *NTS* 32 (1986), 1-30, esp. 2-8.
- (41) Marshall (*Enmity*, 326) は、論敵が仲間同士で比較するよりも、彼ら自身とパウロを比較する、と解釈するが、これはテキストへの読み込み過ぎである、cf. J. Lambrecht, *Second Corinthians*, Collegeville: The Liturgical Press, 1999, 165.

- (42) Käsemann, "Legitimität," 503-509; Barrett, "Paul's Opponents," 65.
- (43) Barrett, "Paul's Opponents," 77-78.
- (44) Forbes, "Comparison," 10-13.
- (45) Käsemann, "Legitimität," 480-482.
- (46) J.Zmijewski, *Der Stil der paulinischen "Narrenrede": Analyse der Sprachgestaltung in 2 Kor 11.1-12.10 als Beitrag zur Methodik von Stiluntersuchungen neutestamentlicher Texte*, Köln/Bonn: Peter Hansstein Verlag GmbH, 1978, 116.
- (47) Käsemann, "Legitimität," 485-493; Barrett, "Paul's Opponents," 70-74; M.E.Thrall, "Super-Apostles, Servants of Christ, and Servants of Satan," *JSNT* 6 (1980), 42-57. *Contra*, Bultmann, "Exegetische Probleme," 26-27; Georgi, *The Opponents*, 62 n.32.
- (48) J.K.Chow, *Patronage and Power: A Study of Social Networks in Corinth*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1992, esp.108.
- (49) Käsemann, "Legitimität," 480; Barrett, "Paul's Opponents," 65; idem, "PSEUDAPOSTOLOI."
- (50) C.K.Barrett, *The Signs of an Apostle*, London: Epworth, 1970; idem, "Shaliah and Apostle," in, E.Bammel, C.K.Barrett & W.D.Davis (eds.), *Donum Gentilicium: New Testament Studies in Honour of D.Daube*, Oxford: The Clarendon Press, 1978, 88-102.
- (51) Käsemann, "Legitimität," 479-480; Georgi, *The Opponents*, 32-40; Barrett, "Paul's Opponents," 64.
- (52) Georgi, *The Opponents*, 40-60.
- (53) Georgi, *The Opponents*, 27-32.
- (54) Käsemann, "Legitimität," 509-521; Betz, *Tradition*, 70-100; Barrett, "Paul's Opponents," 73-74.
- (55) Chow, *Patronage*, 108.
- (56) この単数形は、同種・同族を表す分詞的表現である、cf. Zmijewski, *Der Stil*, 94 n.148; F.Blass, A.Debrunner & F.Rehkopf, *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch* (14.Aufl.), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1976, § 413.3.
- (57) Friedrichが指摘したように、第二コリント書10-13章におけるパウロの論敵と使徒言行録のステファノ像に「演説」「奇跡」「幻」に現れた「霊の所有」という点で類似性があるのであるが、それはステファノに限らず、ルカ文書の使徒像の描写、さらにはその基にあるマルコ福音書を始めとする共観福音書伝承のイエス像の描写と密接に関連するのである。マルコ福音書の「栄光の神学」がパウロの「十字架の神学」と相容れない点については、山田耕太「青野太潮著『十字架の神学の射程』『日本の神学』第30号(1991), 90-95頁、特に95頁、参照。
- (58) Cf. *ἀνταρτός* (10:4, 12:10, 13:9), *δυναμεις* (12:9, 12:12), *δυνατείν* (13:3), *δυνασθαι* (13:8).



- (59) Käsemann, "Legitimität," 499-503; G. Strecker, "Die Legitimität des paulinischen Apostolates nach 2 Korinther 10-13," *NTS* 38 (1992), 566-586.
- (60) Cf. ἀσθένεια (11:30, 12:5, 9, 10, 13:4), ἀσθενεῖν (11:21, 29, 12:10, 13:3, 4, 9).
- (61) Sumney (*Identifying*, 177-179, 181-191) と方法論は多少異なるが、結論はほぼ一致している。

## The Opponents of Paul in 2 Cor.10-13

Kota Yamada

### 1. The Beginning

The opponents of Paul in 2 Cor.10-13 is different from those in 2 Cor.1-9 as seen from the fact that they were the intruders into Corinth (11:4) in 2 Cor.10-13, which is different from the one "who had done the wrong" (7:14) in 2 Cor.1-9.

### 2. Historical Retrospect

The problem of Paul's opponents in 2 Cor.10-13 has been discussed since the days of F.C.Baur and they are divided into the following five categories:

- (1) the Judaizers (F.C.Baur, C.K.Barrett, J.Gunther & G.Lüdemann),
- (2) the Gnostics (W.Bousett, Lütgert, A.Schlatter, R.Reizenstein, R.Bultmann & W.Schmithals),
- (3) the divine man in the Hellenistic and Roman periods (D.Georgi & G.Friedrich),
- (4) the pneumatics sent from Jerusalem (E.Käsemann),
- (5) the hybrists (M.P.Marshall).

### 3. Methodological Implications

Methodology of J.L.Sumney to avoid anachronism is right, but that to avoid parallels in the other Pauline letters is too narrow, and his classification of expressions is too much mechanical. His discussion also lacks the rhetorical perspectives.

### 4. Analysis of Paul's Opponents in 2 Cor.10-13

The opponents of Paul is analysed in detail in the following rhetorical structure.

- (1) Exordium (10:1-11)

- (2) *Propositio* (10:12-18)
- (3) *Narratio* (11:1-15)
- (4) *Probatio* (11:16-12:10)
- (5) *Refutatio* (12:11-21)
- (6) *Peroratio* (13:1-10)

## 5. The Thought and Activities of Paul's Opponents in 2 Cor.10-13

Paul's opponents in 2 Cor.10-13 stress their spirituality that they walk according to the Spirit while Paul walks according to the flesh (10:2). They think that their spirituality is shown in their ability to make good speeches (10:10, 11:5-6), to see visions and revelations (12:1-2) and to do the signs, wonders and mighty deeds (12:12).

On the other hand, they are proud of their own Jewish background of being Hebrews, Israelites, and the seed of Abraham (11:23). They come to Corinth from outside (11:4).

They call themselves as the apostles of Jesus, the workers (11:13), and the ministers of Christ (11:23), and they preach another Jesus, different spirit and different gospel (11:4).

They criticize both Paul's self-sufficiency and his collection for the poor in Jerusalem (11:7-11, 12:15-18).

## 6. Concluding Remarks

The opponents of Paul in 2 Cor.10-13 develop their "theology of power" while Paul expresses his own "theology of weakness". First, they are close to the Gnostics or the spiritual enthusiasts in 1 Cor. when they stress their spirituality. But the elements of speeches, miracles, and visions are new and not seen in 1 Cor. as the evidences of the Spirit.

Second, the facts that they are proud of being Hebrews, Israelites, and the seed of Abraham, they are intruders into Corinth, and they are compared with the super-apostles, reveal that they are Jewish Christians from Palestine. But it does not indicate that they are the Judaizers, nor that they are the Hellenistic divine men.

Third, their spirituality and their connection with Palestine indicate that they are the Jewish Christian pneumatics from Palestine, but it is not evident from the text that they are sent from Jerusalem. It is also apparent that they are hybrists from the text.